

これを観察する方法として、

- ① 観察による評価……子供の行動、態度を含めた総合的な観察記録により、その変容の姿をとらえようとする。たとえば、学習カルテの活用など、その一例である。／また、学習時における子供の発言が、どのような根拠にもとづくものであったかを分析する手法もある。これにはフィルター方式（大阪市立大学）や線結びによる内容分析（東京工業大学坂元研究室）などがあげられる。
- ② ノートによる評価……指導の過程の節々で、子供の理解、能力、態度等の反応を把握するやり方で、最も一般的に使われている。
- ③ 作品による評価……前述したが、さらに要約すると、学習の中で子供が作成した地図、図表、年表、作文、絵、模型などをみて、チェックする評価法である。
- ④ 記述による評価……客観テストや論文テストの特質を生かした作文による記述内容を評価するものである。

これより判断するなら、大六小が社会的関心・態度として取り上げたものは、白石があげた三つのうちの②（社会的事象＝学校で～のはたらきをしている人がいる；その社会的意味＝学校のみみんなの～のためにやっているのだ）であり、評価法として採用したのは主に「②ノートによる評価」と「③作品による評価」になる。すなわち、白石が一般論を述べ、田中がそれを自分なりに受け止め具体的なかたちにしていったということも考えられるのである。この点については、既に20年が経過しており、田中自身記憶が曖昧になっており、先の手紙においても明確な返事はもらえなかった<sup>⑬</sup>。

では、白石は大六小の研究に携わっていたときに、既に表I-1の各単元の「達成目標」や「評価基準一覧」の一部をつくり始めていたのだろうか。そうであるとすれば、そこにある基本的な考え方は大六小の研究同人に示されていたであろう。しかし、この点については、今後白石への聞き取り調査によって明らかにする必要がある。

## ②-2 大森第六小学校の「関心・態度の評価」研究前史：「子どもが前面に出る教育」のころ

私が大六にきたのは、昭和52年でした。お茶大を出て、最初に赴任した学校が中富小学校<sup>⑭</sup>でした。そこに十年もいたので、もうどこかへ出なくちゃいけないというときになっていたんです。校長先生からどこへ行きたいかと希望を聞かれて、家から近いので大六あたりに行きたいと答えたら当時の大六の田上校長<sup>⑮</sup>が、自転車で来てくださいました。中富小の校長先生が話してくださったんですね。田上校長が「うちは今、こんな研究をやっているけど」って研究の中身を話してくださり、「いいかい」っておっしゃってくださったんで、「はい」って答えて大六に行くことになりました。昭和52年の3月でした。おかしいでしょう、3月になってもまだ行き先が決まっていなかったなんて。今じゃ、そんなことありませんものね。

当時、大六では「総合」をやっていました。筑波大の附属小がやっていましたよね。ああいう子どもの興味・関心を大切に学習を組んでいくという「総合」です。「子どもの時間」という名前をつけていました。

### 【インタビュー一註】大森第六小学校の「子どもが前面に出る教育」について

大森第六小学校は、田上校長の下、昭和50年から「子どもが前面に出る教育」のあり方を求めて研究を進めていた。その研究の前提となる子ども観は、「私たちは、『子どもは本来勉強好きで、励ましあって高まっていこうとする願いを持っている。』と、子どもに限りない信頼をよせている」<sup>⑯</sup>というものであり、従来の教科枠にとらわれずに子ども自身の興味・関心を核に学習内容を構成しようとする傾きをもったものであった。もちろん現実の子どもがそういう姿を顕現していないことは、把握している。それについては次のように書かれ、且つその原因についても述べられている。それにもかかわらず、本来の子どもはそうではないの

だということが記述されている<sup>⑰</sup>：

でも、本校の子どもの現状(昭49)をみると、明るく素直でよく働くが、自ら求めようとする追求力に乏しく、みんなが高まっていこうとする連帯性が弱いようである。また、しっとりしたところが薄いようである。このことについて、私たちは、子どもがこのように育ってきた環境的要因を探った。

本校は児童数450、13学級で、学区は部品作りの小さな町工場が建てこんだ地帯にあり、二階が住まい、下が工場になっている住居を兼ねた工場が多い。親たちは、その経営者からパート勤めまであり、子どもは、父母隣人が働いているところを四六時中、目のあたりにし、景気の波をまともにかぶる中で生活をともにしている。

本校の子どもの働きのよさ、とことん追求する力の乏しさ、手を取り合う連帯性の弱さ、そして粗野に感じられるところなどについて、こうした親の働きぶり、大企業依存の親の姿勢や街の動き、自然に恵まれない地域環境に、垣間見る思いがする。…(中略)…

そこで、私たちは、こうした子どもをつくり出している環境的要因に関心をよせるとともに、子どもの学力作り、性格形成は学校教育に負うところが大きいと考え、従前の教育について深く反省し、私たちみんなが納得のいく教育——「子どもが前面に出る教育」を模索するところに、ゆとりと充実を見出す——をうちたて、年度を重ねて「やる気」と「助け合い心」を育てれば、子どもは、初めに掲げた本来の姿をあらわにし、私たちの信頼に応えて、追求力と連帯性が高まるにちがいないと考えるに至った。

要するに子どもを徹底的に信頼し、教育の根底に子どものニーズを据えていこうという児童中心主義の教育観に立った研究が進められていたのである。このような立場で教育を進めようとする、文部省の学習指導要領の教育課程の立て方、すなわち教科、道徳、特別活動という三構成では不十分ということになる。子どもの要求とは異なるところで学習内容が設定されているからである。大森第六小学校は、これを解決するために「子どもの時間」というものを教育課程の中に位置づけた。これについては、次のように書かれている<sup>⑱</sup>。

子どもの時間は、「ゆとりの時間」が与えられて、それに活動をあてはめたのではなく、指導要領の教科・領域の枠にとらわれない場が欲しくて自ら設定したもので、それだけに教師児童の意気込みも強く、実践的成果をたしかめあっている。

もちろん、文部省の研究指定校ではないから、教科・領域の時間をやりくりして生み出した。毎日1時間(したがって、週6時間、年間にすると210時間)は欲しいというのが、理想だったようだ。しかし、現実には、週2～3時間であったと書かれている<sup>⑲</sup>。

子どもの時間には2種類あった。一つは「がんばり表子どもの時間」と呼ばれたもので、一人一人の子どもが自分の習熟度にあわせて、教師の支援を受けながら主体的に学習を進めていく時間である。「教科学習に還元」されるものとされていた<sup>⑳</sup>。『子どもが前面に出る教育』には、次のような事例紹介がある<sup>㉑</sup>。

#### 事例6 7つの教室で学習するオープン子どもの時間(4, 5, 6年)

〈登校してすぐ7つの教室へ〉

週2日(木)(土)4, 5, 6年の子どもは登校して出席を明らかにし、用をすませると、各自それぞれの計画(特にグループの計画)で7つの教室にわかれて「がんばり表」<sup>㉒</sup>に取り組む。これにより子どもは1校時の終わりまで8時35分～9時35分までゆったり学習ができる。

この日は職員朝会はなく、教師も出勤してすぐ教室に赴く。ちょうど各学級2クラスで学級担任は6名、12学級なので専科教師2名、それに教頭が加勢して、国語・社会・算数・理科・音楽・図工・体育の7つの教室にわかれて、子どもの学習相談にのる。残る2名は遊軍となって子どもの人数に即応することになっている。ふつう体育は2名となる。

もう一つは「学級裁量子どもの時間」であり、これは「集団活動のなかで創作意欲をさらに高めるためのもの<sup>(23)</sup>」とされていた。田中先生が「総合」をやっていたというのは、これを指す。

次のような事例<sup>(24)</sup>を読むと、これが現在の「総合的な学習の時間」の名のもとに各地の先進校、特に子どもたちの興味・関心を最優先して学びを展開させようとしている学校で行われている実践に勝るとも劣らぬものであることがわかる。ただし、一つ大きな違いがある。それは「協力し合う子ども」を求めていたことである。したがって、クラスが一丸となり何かを生み出すことがめざされていた。

……子どもたちの「3年生に進級した。中学年になった。」という自覚は、(2年生のときに学級裁量子どもの時間にやっていた)お誕生会などから一歩ふみ出して「組全体の人が、入れるぐらいの家作りをしよう。」と、組の半数以上の19人A班は、意欲的なまとまりをみせた。場所、材料、作業などから、3年生としてはむずかしいのではないかと、という教師の言葉も受けつけにくいぐらい自信満々。他の15人B班は、学区の立体模型をつくらせて、1・2年生にも役立ててもらいたいと、こちらもなかなか意欲的で、教師が早急に学級を一つの方向に決める事は、子どものやる気を阻害することになりはしないかと、しばらく子どもの動きを見守ることにした。

こうした「子どもの時間」を生み出すための時間のやりくりは、教材の精選によって行われた。この教材の精選の仕方は、重点教材とそうでないものとに分けるといえるものであった。そして重点教材を「探求コース」と名づけた指導法、すなわち、子どもにじっくりと考えさせ、追求させるという指導の方法をとった。これを大森第六小学校の教師たちは「ころがす学習」と呼んだ。

先に紹介した大森第六小学校の『昭和55年・56年度大田区教育委員会研究奨励校研究報告 一人一人の学ぶ力を高める指導の工夫』にあるテーマ設定の理由について述べている文章中に「学習のサイクル(問題の意識化→探求→整理・発展)を子ども自身が回転させ」という表現があった。「ころがす学習」という言葉をもう少し固い言葉に直したものであろう。

田中先生はインタビューのなかで、「昭和55-56年の研究当時には、それ以前からの教員が研究推進委員などとして残っていて、これまでの研究の基本的な考え方とか子どもの捉え方といったものは引き継がれていました」と語った。他方、重点教材でないと言われたものは、「急行コース」と名づけられた指導法によって教えられた。すなわち、「教師主導型の授業で、ポイントをおさえてあっさりと言導する」という指導法がとられたのである<sup>(25)</sup>。

「ころがす学習」について、重松鷹泰は次のように書いている<sup>(26)</sup>。

大森第六小学校では、「子どもがころがす授業」という、めずらしい言葉をつくった。「少し奇抜すぎはしないか」と、わたくしは申したのであるがいつの間にか、先生方の好んで使う言葉になってしまった。先生方自身が納得し、心をこめて使われるなら、まわりでとやかくいうべきではあるまい。

「子どもを生かす授業」という言葉がある。しかもその中には、子どもの考えや努力を活用する、という意味の場合と、一人一人の子どもに人間としての生きがいを感じさせるという意味の場合との二つがある。

……(中略)……

「子どもがころがす授業」というのはどうであろうか。「ころがす」という言葉が、いかにも視覚的である。それだけに、授業というものが、みんなの頭の中に描かれており、それを子どもたちがみんなで推し進めていく、という印象がある。大森第六の先生たちは、「今日は授業がよくころがった」とか「ようやくころがりはじめた」という言葉を使う。教師にも、子どもにも、授業のイメージがあるということが特色である。

ここから窺えることは、「子どもが前面に出る教育」においては、「子どもの時間」のみならず、教科学習の場面でも、可能な限り子どもを授業の担い手にしようと大六の教師が授業を構成していたことである。それは「子どもたちが、自ら追求し、それによって自己を変容させ成長させること<sup>(27)</sup>」をめざした授業づくりであった。こうした授業づくりは、理念レベルにとどまらず実践レベルでかなり具現化されていた。たとえば1年生の算数の授業から経験的に得た授業づくりのあり方として次のようなことが書かれている<sup>(28)</sup>。

1年算数の授業で「輪投げ遊びの得点がすぐわかるようなまとめ方(表作り)」を教師の目標とした。しかし、子どもたちからは、表作りを必要とする声が出なかった。そこで、この授業からは目標、目標と内容、方法の関連について、次のようなことがわかった。

1. 教師目標は、子どもの活動に対応できるように大きく構え、柔軟なものにする。
2. 教師目標と子どもの追求に予想外のずれが生じたら、子どもの追求を尊重する目標に変える。

また、教師が一方的に表づくりの必要性や、よい表をおしつけず、子どもの活動、考え方を大切にしつつも、子どもの視点を転換させ、広げ、目標に近づける工夫として考えたことは、

- ・表づくりの必要性を生み出すために、問題把握にむかわせる輪投げ遊びの時間を十分とる。
- ・よい表の選定を急がず、自分から表を作り出す過程を大切にして、じっと待つ。
- ・個性的、弾力的な思考を生み出すよう、それぞれのつくった表を認め合う。

……(中略)……

個々の子どもの内からの要求、欲求に即応した目標、自分の力を出し切り活躍できるように大きく構えて動きの取れる目標、子どもの出方によって変えられる柔軟な目標、自分の生き方が学べる目標であるとき、子どもは、主体的に活動し、個性的な思考を深め、その生き方をも深めていく、これが子どもを生かす目標ではなかろうか。

こうした実践記録や実践の振り返りから窺える「子どもを前面に」出す大六の教育とは、質のよい・児童中心の教育であったということである。すなわち、手立てを施して、子どもたちの課題意識が熟成するのをじっくりと待ち、学習活動も子どもたちが試行錯誤で進めることを許容し、じっと見守る。しかし、「こんな子どもに育てて欲しいという教師の願い、こんなことを指導したいという教師の目標は必要である<sup>(29)</sup>」という構えをしっかりと持っている授業を理想とするような教育がめざされていたのである。換言すれば、教師の指導性の尊重が子どもの自主性や主体性の否定を意味せず、子どもの自主性や主体性の尊重が教師の指導性を否定しないところに成立する教育がめざされていた。

職場の雰囲気については、重松の「ここに生まれたもの」という文章から窺うことができる。長くなるが引用する<sup>(30)</sup>。

田上さんは創意の人であり、熱意の人である。しかし、それだけに容れられないときもあり、淋しい悲しい思いをしたこともあったろう。奈良女高師附属小学校から出て、東京都の教育に没頭するようになってから、22年が経過した。そしてこの大森第六小学校が最後の学校になりそうである。

……(中略)……

今年（昭52）5月6日に、はじめて6年生の社会科の授業を見せてもらったが、到頭、東京にもこういう社会科の授業が生まれたか、というほど、すぐれたものであった。私は、「教育じほう」（都立教育研究所発行9月号）にその解説を書いた。

……（中略）……。

（まだ、中間発表の段階の大森第六小学校の研究について語るのに「ここで生まれたもの」という）大胆な演題をつけたのは、もはや後退しないと思われるいくつかの事実を確認したからである。

その1つは、校長さんと先生方、先生たち相互、そして校長さんや先生方と子どもとが裸でぶつかれるようになってきた、ということである。ひたすらに、子どものためその子たちの教育のため、ということと助言しあったり主張しあったりする、ことができるようになったということである。

その2には、子どもたちはもちろん、教師たちにも体当たりで仕事をし、労を惜しまない、という風が生まれ、かつ育ちつつあることである。

その端的な表れは、5年の海賊船造りである。体育館を2階につくり、階下に広い空間（ピロティ）があること、また旧体育館の廃材をもらいうけたという希有の条件に恵まれてはいるものの、先生方や子どもさんたちに体当たりで何ものかを、作り出そうという勇気がなければ、とてもできないことである。

……（中略）……。

しかし、体当たりで新しいものをつくろうという動きは、海賊船造りに限られているのではなく、学校のうちに、ぶつぶつと泡立ち始めているのである。

（52. 9.20 都立教育研究所長 重松鷹泰）

重松のこのような語りの背景には、田上校長の次のような苦勞がある<sup>③</sup>。これも当時の大六の雰囲気を表すものなので引用する。

この研究には首をかけた。いくつものことがありました。はじめに指導内容にとらわれない「子どもの時間」がほしい。これは職員全員賛成でした。さて、どこから時間をとるかということで、私はいくつかの候補の中に評判のよくない「道徳」を入れました。これは1つのかけでした。

これについて「校長さんは港区を振り出しに、狛江、町田と転々と動いているが、道徳を削ったら、遠島で島にとばされるから、よした方がよい。」とかばってくれました。それで国語と学級会から吸い上げましたが、都の訪問を受けるにあたって、どう説明するかが、次の関門になりました。教育課程子ども版や、子どもに表れ始めた事例をいくつも、何人かの職員が話したら「たいへんけっこう、都の指導主事を全教科領域にわたってセットして応援することも考えられる。」とさえ、いってくださったのです。……（中略）……。

それからの実践でも、たびたび覚悟をしました。先生たちには、「よかれと思うことはどんどんやってください。責任は私がとります。」とあって、事故が起こったらついていないと諦めて処分を受けることにしました。

今年（昭和52年）の移動教室での漁師の生産活動への参加もその1つでした。沖は荒れ模様と聞きながら、子どもひとりひとりに救命具をつけさせたとき、どうして夏の学校プールで救命具をつけて飛び込む練習をしなかったか悔まれました。へさきの子どもが波をまともにかぶって、帰りついたとき、学校への電話の第1声は「首がつながったよ。」でした。

大六は、田上校長の下、児童中心主義の教育思想に立ち、子どもの興味・関心を大切に、子どもたちがわからないことを追究していくような授業と子どもたちが本気で取り組めるような作業活動を実践の核に置いた教育を進めていたのである。そして、それは決して当時の学習指導要領の枠内におさまる様なものでは

なかったし、学校の中だけに、ましてや教室内だけにおさまる様な実践でもなかったのである。

公立学校でこのような実践を進めていこうとするならそれなりの理論武装と覚悟をしなくてはいけない。その覚悟は田上校長の「この研究には首をかけた」という言葉に集約されている。

また他からの批判に応じて大六の実践を正当化するための理論は、次のようなものであった<sup>32)</sup>。

（「子どもの時間の設定は、公立学校として、現行指導要領の範囲を逸脱していないか」という疑問・批判に応じて）子どもの時間は「がんばり表子どもの時間」「学級裁量子どもの時間」の2つに分けている。これは子どもをていねいにみつめた、私たちの実践と反省から生まれたものである。

「がんばり表子どもの時間」（週1～2時間）については、教科から吸い上げた時間を教科に還元している。ただ、吸い上げた教科に、全児童一律にかえすのではなく、子ども自らによる取り組みに応じ、ひとりひとりに即してかえすようにしている。

一方「学級裁量子どもの時間」（週1時間）については、教科の時間を吸い上げたというよりも、教科に優るとも劣らない活動の時間が欲しくて設定したものである。それが、つめこみ教育のいきづまりの打開ともからめて、思い切った指導内容の精選となったのである。

だから、「これらの措置は、教育課程の弾力的運用（昭47）の許容内にあると考えてきた」し、さらにその後に出された「中教審答申（昭51）、新指導要領（昭52）、同移行措置（昭52）により」、こうした考え方は支持されるものと思える、したがって大六の教育実践は「学校に任された教育課程の創意工夫の一環にある<sup>33)</sup>」というのが理論武装の仕方であった。

学習指導要領に必ずしも適合的でなくとも、自己の教育理想をかたちに表そうとし、そして理論武装もきちんと行っていく職場、子どものためになると思えば労を厭わず、ときには傍目からすると無謀とも思える実践にまで突き進んでいく職場。こうした田上校長に率いられた大六の教育実践のあり方を、重松氏は「荒御魂」という語を使って言い表した<sup>34)</sup>。

神様の御魂に、荒御魂と和御魂がある、といわれている。それは、われわれ人間にも、あるいは人間の集団にもあてはまることではあるまいか。

荒御魂は眠っているものの眼をさめさせ、たじろいでいるものに向け声をかけ、新しい道を切りひらく精神の活動である。和御魂は、疲れているものにくつろぎを与え、心配しているものにやすらぎを与え、あるもの、続いてきているものを受けいれるのである。…（中略）…大森第六小学校においては、小気味のよいほど、現状の批判が行われ、新しいあり方が追及されている。めずらしいやり方をする学校、新奇をほこる学校とみなす人々がいるかもしれないが、それは半面にすぎない。本当は、地域の動きも、子どもたちの願いも、教職員自身の個性や能力をも、ありのままにあたたく受けいれながら、学校のあり方、生活のあり方をつくってきているのである。

田中もこうした職場の一員として教育実践に取り組んでいたのである。再び、田中の語りに耳を傾けよう。

（以下、次号）

〈註及び参考文献〉

- ① もう5年前に退職されたということだが、本論ではそのように呼ぶことにする。
- ② 大森第六小学校 1981 「昭和55年・56年度大田区教育委員会研究奨励校研究報告 一人一人の学ぶ力を高める指導の工夫」, 4頁。
- ③ 同上。
- ④ 同前。
- ⑤ 東京都大森第六小学校, 1978, 「子どもが前面に出る教育一ゆとりある充実した教育を求めて一」明治図書, 9頁。
- ⑥ この聞き取り調査のおよそ一年後の平成14年2月21付けで田中先生からいただいた手紙によると、大森第六小学校は、平成13年度一杯で閉校となる。
- ⑦ 白石裕一(しらいしゆういち)。当時、大田区教育委員会の指導主事。
- ⑧ 田中が頼まれて書いたものは、「初等教育資料」昭和57年5月号と中野重人(編著)「小学校授業実践資料 ②関心・態度を育てる授業と評価」, 明治図書, 1984年, の二つに載っている。
- ⑨ 新見謙太(しんみけんた)。大田区の指導主事の後、都立研究所の指導主事となった。
- ⑩ 中野重人(編) 1985 「講座・社会科基礎学力の指導(小学1・2年)」明治図書, 217-221頁; 224頁。
- ⑪ 同上書, 224頁。
- ⑫ 同上書, 216-7頁; 但し、引用文中の/は、引用者による。
- ⑬ 田中かよ子の筆者宛の私信(平成14年2月21日付け)
- ⑭ 大田区立中富(なかとみ)小学校。昭和26年、大森第四小学校から分離して創設された(「大田区史 下巻」(平成8年刊)の年表による)。
- ⑮ 田上昇。東京都大森第六小学校「子どもが前面に出る教育一ゆとりある充実した教育を求めて一」(明治図書, 1978)の「はしがき」は重松鷹泰の筆になるものである。そこには田上校長について次のように書いてある。  
前校長の田上昇先生は、三十年前、奈良女高師附属小学校の若手の教諭として、算数の指導やウサギの飼育に打ち込んだ人であり、わたしは同校の主事として、互いに切磋しあったものである。互いに意見を出してなかなかゆづらなかつたのである。
- ⑯ 東京都大田区立大森第六小学校, 1978, 9頁。
- ⑰ 同上。
- ⑱ 同上書, 36頁。
- ⑲ 同上書, 13-14頁。なお、巻末に資料1として「子どもの時間の時間割」を付した。
- ⑳ 同上書, 3頁。
- ㉑ 同上書, 55頁。
- ㉒ 巻末に資料2・3として、算数と体育の「がんばり表」を付した。
- ㉓ 東京都大森第六小学校, 1978, 55頁。
- ㉔ 同上書, 41-42頁; 但し、括弧内は引用者。
- ㉕ 同上書, 17頁。
- ㉖ 同上書, 2頁; 但し、括弧内は引用者による。
- ㉗ 同上書, 57頁。
- ㉘ 同上書, 60-61頁。
- ㉙ 同上書, 59頁。
- ㉚ 同上書, 149-150頁; 但し、括弧内は引用者による。
- ㉛ 同上書, 151頁; 但し、括弧内は引用者による。
- ㉜ 大森第六小学校, 1978: 153頁。
- ㉝ 同前。
- ㉞ 大森第六小学校, 1978: 1頁。

(吉田正生・本学助教授 旭川校)

資料1 東京都大田区立大森第六小学校の「子どもの時間割」

	月	火	水	木	金	土
8:35 朝会		※がんばり表を使い ※1～3年は学級で ※4～6年は、学年学 級の枠をはずした オープンで ※自分でめあてを決め る。		全校 がんばり表 子どもの時間		4. 5. 6年 学級裁量 子どもの時間
1						
2				・学級単位で ・子どもと教師の一致したやりたいことを ・息長くつづける。		
3						
4						
5			4. 5. 6年 学級裁量 子どもの時間			

(出典：東京都大田区立大森第六小学校 1978 「子どもが前面に出る教育」，明治図書，33頁)

※ 紙数の関係があり，前号の資料2及び今号の資料2及び3については，次号に掲載する。